

# 火星

火星900号記念

平成27年1月号



# 七曜抄 (九)

山尾玉藻

スケボ一の振ぢり反しぬ秋の風  
枯蟪蛄の貌のふりむく能舞台  
神留守の水さわがする網代掛  
床の間を灯して眠る雁のころ  
野分だちきし対岸のシャンデリア  
墨磨つて鴟の速贄思ひをり

てつぺんの締つてきたる松手入  
魯田に鶏の出てゐる旗日かな  
冬立つやオニオンブレッドちぎり食ぶ  
列柱の影踏み冬の立つ日かな  
初しぐれありし犀川渡りけり  
薬屋にまむし黒焼時雨くる  
遥かなる鯉田の上のしぐれ雲  
茶の花を夫の銚ちろり釐りに挿しにけり

陵の鉄扉の匂ふ小春かな  
古着屋の匂ひにみたり十二月  
山音の変はつてみたる紙干場  
一陽来復にはとりが網を抜け  
何ごとのありても黄なり石露の花  
仏手柑の軸掛け父の忌なりけり  
松脂の上を滑れる冬の雨  
六波羅の夜を来しオーバーコートかな

僧形や花柵の闇へ消え  
飛び石をひとすぢに庫裡冬ざるる  
冬ざれや青竹かつぎゆく法被  
縄巻ける笥の見かる炬燵かな  
梟の夜や文鎮に紅の房  
綿虫が爪折れ傘に入り来たる  
糸口といふがどこかに枯蓮田  
おまんだら見てきし夜の湯冷かな

水の面の雨見てゐたる懐手  
蕪畑のみどりに染まる厠神  
財布より出でし熊胆山眠る  
冬の日をねぢこむ蘭の根方かな  
てのひらにうけひとはだの龍の玉  
木菟や父が前掛けはづすころ  
寝不足の貌が海鼠の水覗く  
雪暗や大赤鼻の伎楽面

風花へお多福人形三つ指す  
隣室に燈明ゆらぐ闇汁会  
闇汁の杓文字が闇を滴らす  
鳩かづくたび薄れゆく昼の月  
冬ごもり路面電車が軒鳴らし  
赤ん坊のつぶやきに照る冬木の芽  
閻王の睨みに冬芽こぞりけり  
冴ゆる夜の菰の蘇鉄に謀りごと

カナリアに遠き昼火事ありにけり  
マスクの子昆虫館を出で来たる  
マスクして人の世潤みきたりけり  
蠟梅の匂へるひと日ふつつかに  
着膨れも予防注射も怠らず  
一二枚剥ぎ白菜のそらぞらし  
牡丹の敷藁美しき札納  
年詰まる静かな黒き蠅とゐて

柚の木に柚ひとつある年の空  
もういちど松に目をやり掃納  
年立ちし櫂の机拭ひけり  
大鉢の仏手柑にほふ年の礼  
初湯して稚の臍より銀の泡  
端山より睨を来たる春著の子  
三日かな堂島ロール切り分くる  
紅ちよんと薯蕷じょうよ饅頭松の内

(一部『俳壇』十二月号『俳句界』十二、一月号より再掲)

## 推薦のひとば

### 第十七回 火星賞

山田 美恵子

平成二十六年年度の火星賞を右の通り決定致しました。

平成二十七年一月

火星俳句会主宰

山尾玉藻

探梅の風にさらはれさうな声  
花椎の香に蒸されぬる鉄の音  
ゼリー食ぶる男の貌の大暑かな  
春の水我の映れば水輪立ち  
尻立てて猫の見定む野分晴  
季語の本意、本情を正しく把握する器量の持ち主であり、それを日常の中で力みなく發揮するので、好感度の高い作品となっている。

月も日も水晶色や鴟の贅  
潮騒の上りくる崖落し角  
フレアーが芝にまあるし立子の忌  
姿見の覚えてゐる家桐一葉  
インパクトには欠けるが、写生の眼をよく働かせものの存在を描きだす。

野遊のちよつと見ぬ間の背丈かな  
息吹いて息の親しむ玉子酒  
あててきしパーマの匂ふ春の宵  
赤子泣くたびにかがよふ福寿草  
飯の香に夕暮ぬくき五日かな  
家鳴らす風のひと日や毛糸編む

何気なく伝わってくる充足感が快いが、六句目は少し違う。十年前に「春帽子いざ遊ばんむと夫の買ふ」と発表されて直ぐにご主人が急逝、彼女は深い悲しみに打ちひしがれた。しかし一年後見事に復活、可愛げな風貌に反して強い精神力の持ち主である。けれど、夫と過ごした家が鳴る現実がやはり心細さと呼び覚ましたのだろう。毛糸を編む翳りある横顔がこころを打つ。

ここ数年注目してきた美恵子作品であるが未だ安定感に欠ける危うさが気になる。しかし敢えて推すのは、美恵子さんに緩みない歩みを大いに期待するからである。

# 太白星

どこまでもついて行く子や秋祭  
球根を植ゑたる指のあたたかし  
秋雨の花壇を囲む煉瓦の朱  
乳牛や収穫祭の草を食み  
乳牛の背なの模様は冬日さす  
雪山の見え乳牛に空青し  
山眠り標本室に蝶眠る

杉浦典子

浜口高子

化野の闇を新藁匂ひけり  
印南野の光すみずみ耕衣の忌  
猪垣を繕ふ新藁さばきつつ  
台風来るぞ来るぞ鬼の子宙ぶらりん  
月白や馬かたまつて戻り来る  
鴟の晴ガラスの中の模型の駅  
しぐれ来るかさぶたとなる大樹の幹

# 火星作品

## 山尾玉藻選

露の玉夜明けの色を張りにけり  
露むすぶ草に茶碗のころがれる  
宝塚蘭定かず子

箴打てば塵のかがよふ神無月

たれ言ふとなく水鳥へ下りゆけり

止り木の鶏にしだり尾七五三

月蝕の一夜明けたる草の冷  
小林成子

子規庵の秋風に夫待たせぬし

熟れ柿の木灰に落ちし夕べかな

連休のなか日しづかや稲の秋

赤い羽根つけ食堂車ありしころ

萩叢のすそよごれぬし寒露かな  
山本耀子

末枯るるもの焼く朝恙なし

与謝郡の露を踏みきし旅鞆

杭打たれ雨の八千草匂ひけり  
富士壺の船の横腹北風鳴れり  
夫留守の二階の遠し鉦叩  
朝寒や金泥壁にコンセント  
電線の混み合ふところ葛の雨  
空青すぎるくさびらを踏まぬやう  
行合の藁塚より暮るる丹後かな  
尻立てて猫の見定む野分晴  
夜輿引に青き金星出でにけり  
秋の野に展べ学生の設計図  
雁や陶土こねぬる建築科  
雁を追うてゆきけり飛行船  
生きてゐる胸月明にぬれにけり  
秋の蚊を大事に打つて退院す  
父もゐる母もゐる山月渡る  
泳ぐやうあるくりハジリ野分過ぐ  
糸子さんの冬瓜おもふ月夜かな

八幡大山文子

宝塚山田美恵子

大和郡山城 孝子

# 選のあとに

## 山尾 玉藻

たれ言ふとなく水鳥へ下りゆけり 蘭定かず子

水鳥が渡つて来ているだろケという期待で誰からともなく水辺へ下つて行つたのだ。季節の移ろいに聴くその喜びを共有出来る仲間たちは有り難いもの。武庫川吟行の囑目詠。

月蝕の一夜明けたる草の冷 小林 成子

皆既月蝕を詠んだ作品に沢山出会つたが、掲句は月蝕から外した所で月蝕を詠んで独自性がある。一昨夜の余りにも幻想的な景からまだ覚めやらぬ思いが「草け冷」へと繋がつた。

萩叢のすそよごれぬし寒露かを 山本 耀子

萩の花が零れ地面をうつすら染めるのは美しい。しかし盛りを過ぎるとそれも錆色となつて侘しい景に変わつてしまう。「すそよごれぬし」の上質の措辞が「寒露」の季感を弥増す。

夫留守の二階の遠し鉦叩 大山 文子

御主人が入院という心細さが二階の用をつい後回しにさせ

るのだろう。夫の存在の大きさを実感する「二階の遠し」なのである。氣丈夫そうな作者の正直で可愛らしい本音の一句。

尻立てて猫の見定む野分晴 山田美恵子

猫が興味を抱く何か近くに出現したのかも知れないが、「野分晴」そのものを見極めていても解せて楽しい。当然ぴんと立てた尾も見えて、そこに猫の積極的意志を感じる。

秋の蚊を大事に打つて退院す 城 孝子

作者は精神力で大病を跳ね除けられたが、再び骨折と言ふ災いに遇われた。「大事に打つて」には、身を以つて命の重さを嫌と言うほど実感した者ならではの切実な願いが籠もる。

懸崖菊象の叫びのありにけり 坂口夫佐子

大胆な取り合わせに驚いたが、考えてみれば動物園の囑目詠なら全く不自然ではない。全く異質なものがごく自然に混在する世界に改めて驚き、そして面白がっている作者。

父逝きて椅子のこりたる夜長かな 松井 倫子

生前のお父上がいつも座しておられたロッキングチェア一

であろうか、灯の下で静かに影を落としている様子が見えてくる。季語の力を得てものの存在が多くを語りかける。

菊 膾 兄の酒杯に沈みぬし 深澤 鱧

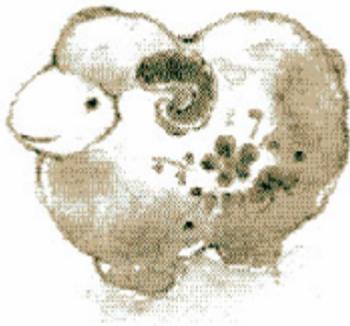
作者が兄上の盃にご酒を注ごうとしたその時、盃に菊の花弁が沈んでいるのに気づいた。他のものなら詩にも絵にもならないが、菊膾に漂う典雅さが一句に味わい深さを生んだ。

台 風 皿に光れる鶏の骨 涼野 海音

切ない事だが台風と言う非常時にも人は常と変わらず飲食をする。皿の上には見事なまでにせせり尽くされた鶏の骨が転がっている。「光れる」と捉えた眼差しがその不条理を語る。

裸 婦 像の臀が秋の草の中 藤本千鶴子

野に据えられた裸婦像なのであろう。美しい秋の千草に囲まれた裸婦像の臀部はいかにも豊かで逞しそである。へ以下略



# 恒星圈

村上留美子

銀輪の過ぐる度の葛の揺れ  
大き背の眼鏡上げ下げ菜虫取  
団栗を拾ふ子野外コンサート  
稲荷山に枝払ふ音秋早  
鐘の音にかむさつてゐる昼の虫

松井倫子

山田美恵子

四阿に箒吊らるる雁渡し  
溝川に水滾り入る神の旅  
草を焚く煙秋風呼びにけり  
草抜きの心たひらに鴟の晴  
塗机も椅子も猫足露けしや

牛糞の匂ふスコップ秋早  
柿採るや時々鯉を驚かせ  
十三夜道場の床鳴りどほし  
蛇穴に入る白神の水を越え  
仏まで群鹿あるく十三夜

松山直美

山本耀子

隠沼の空にただよふ蒲の絮  
草ぐさにまぎるる紅や十三夜  
ことごとく夕日に傾ぐ藁ぼつち  
赤松の肌の濡るる秋日かな  
切り岸に群れくる魚のすさまじき

水槽の底にやり烏賊うそ寒し  
蚊遣香腰に傾りの栗林  
花芒供へ仏間に風よびぬ  
水路閣の裏へ回りし雪螢  
枯れ急ぐものの中なる槍鶏頭

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

日輪は水に映らず秋燕  
ゆで卵かがやいてゐる野分かな  
雁渡しホームの端に城見ゆる  
シェーバーの充電ランプ台風圏

西村節子

油掛地蔵の匂び野分立つ  
をさまらぬ池面のゆらぎ寒露かな  
月蝕の月に篋ゆれどほし  
母の掌にすぐにあふれし木の実かな

湯谷良

傾きし鶏頭になほ日差しあり  
鴨のさわぐ暗峠口  
壺の萩しきりに零る招き猫  
船頭の長持唄にもみづれる

藤本千鶴子

秋深し玉座の下にねずみとり  
球場の壁ひたのぼる蔦紅葉  
天高し御苑に並ぶパイプ椅子  
小豆煮るにほひ流るる嵐山

前田忍

指先にハーブの匂ひ秋深む  
身にしむや鴉の止まる神の岩  
松茸の剥がれさうなるにぎり飯  
赤とんぼ舟溜りより湧きにけり

根本ひろ子

神池の鯉のごつたや雁渡し  
人ごゑに南蛮煙管褪せきたる  
秋の夜の信号待ちの吉野線  
キャンパスの塔遥かなり秋の暮

井上淳子

紅葉散るたびうろくづの遡る  
神送り鴉は樟の頂に  
秋空へヒマラヤ杉の枝の張り  
露ぬれの粗草に置くカラーコーン